

教材活用例(1) 「みぶの花田うえ」

〔小学校低学年 主題：町のじまん 内容項目：4の(5)〕



(1) 開発資料の実際

ア 素材の説明

(ア) 素材の概要

壬生の花田植は、地域の人たちのつながりによって、昔と変わらずに続けられてきた、田植えの終わりを祝う祭りである。現在では毎年6月第1日曜日に行われている。

その昔、田植えの時期は、過重な労働が集中的に行われる時期であった。そこで、人々は田植歌を工夫し、田植えを歌にあわせてすることで作業能率をあげてきた。田植えの作業の最後に、一番大きな田で、にぎやかに囃しながら行われるのが「囃田」である。その華やかさから「花田植」とも呼ばれるようになった。壬生の花田植は昔からの形をほとんど変えずに、続けられる規模の大きな花田植である。ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定している。



(イ) 4コマ絵

家族と一緒に「壬生の花田植」に行くものの、屋台での買い物に夢中の主人公。アメリカから来たトーマス先生に出会って、夢中になって花田植を見、その良さに気付いて友だちにも教えてあげたいと考える物語を構想し、起承転結にまとめた。

	起	承	転	結
場面のイメージ図				
絵の説明	私は昔から壬生の花田植が好きで家族と毎年行っている。	友だちのみよ子に出会い、一番楽しみにしていた買い物(露店屋台)の方に行って買い物をしている。	田んぼで花田植を見ていたトーマス先生に出会う。トーマス先生から花田植の素晴らしさについての話を聞いて、壬生の花田植の素晴らしさに気付く。	花田植が終わり、学校に行ったら、友だちに壬生の花田植のすばらしさ話をし、てあげたいと感じる。

イ 資料の解説

【作成の要点】

今回の資料は、「私の住む町には、みんなで力を合わせて続けている素晴らしい祭りがあるんだね。うれしいな。」という主人公の気持ちに共感させ、郷土に対する愛着を感じさせることをねらいとして作成した。

低学年の道徳の内容の指導の観点を踏まえ、無形文化遺産・伝統芸能としての素晴らしさではなく、郷土の人々との触れ合いを深めることで郷土への愛着を深めることをねらい、特に祭りをみんなで力を合わせて続けてきた人々に焦点を当てた記述を目指して作成を行った。また、この資料の特徴は、「トーマス先生」と出会う場面を設定したことにある。低学年の段階で理想的な価値を一番受け入れやすいのは、教師や保護者の言動である。そして、「花田植」のすばらしさが世界的に認められ、誇れるものであるということを、さらに際立たせるために、違う文化を持っている人物として英語指導助手である「トーマス先生」を設定し、主人公に祭りの良さを伝えるようにした。

地域の資料だからこそ、「資料について考えることがそのまま自らの生活とつながる」という部分があってもよいのではないかと考え、「明日学校に行ったら花田植について友だちに話してあげる」という部分を作成し、学習者が主人公に成り代わり、児童自らが「私なら、どんなふうに壬生の花田植を話していこうか」と考えることができるようにした。



【心に響くちょっといいはなし】

花田植は、稲作をおこなってきた日本人の生活のありさまをよく示す行事といえる。昭和51年、川東・壬生両田楽団からなる「壬生の花田植」が国の重要無形民俗文化財として指定をうけ、平成21年度にユネスコに世界無形文化遺産として推薦されることが決定した。

地域の人たちは、「この祭りを残し、伝えていかなくてはならない。」という思いとともに、地域の人達のつながりを大切にしている。壬生の花田植の練習に行って、踊りを教わることは、文化の伝承という意味合いと共に、「地域の青年の仲間入りをする」という意味合いが大きいように感じられた。「田植えが終わったこの祭りの楽しさ・コミュニティーへ参加する楽しさ、青年への通過儀礼としての役割」がこの祭りが、長い間、大きく省略されることなしに、受け継がれてきた原動力であるともいえる。

また、「壬生の花田植」は、このお祭りの形式や踊りのすばらしさだけを取り上げて、ユネスコに世界無形文化遺産として推薦されたわけではなく、「日本人の米作りの営み」を表す「文化的な価値」が高いものの一つとして推薦されているということである。

「みぶの花田うえ」

ひろ子の町には「みぶの花田うえ」というおまつりが、六月のさいしょの日よう日にあります。きれいなかざりをつけたうしが出てきたり、きものをきた人たちが、たいこにあわせて田うえをしたりするおまつりです。ひろ子はまい年、かぞくみんなで出かける、このおまつりが大すきです。

おまつりには金ぎょすくいや、わたがしのおみせも出ています。ひろ子は、わくわくしてたまりません。かぞくといっしょに田んぼのちかくまで行って、花田うえを見ようとしました。すると、おなじクラスのともだちがやってきて

「ひろ子ちゃん、おみせを見てまわろうよ！」

といいました。ともだちと手をつないだひろ子は、はしって、おみせにいきました。そこには、ともだちがなん人もいて、ひろ子はむちゅうでおみせを見てまわりました。

田んぼのほうを見ると、えいごをおしえてくれているトーマス先生がいました。ひろ子は、みんなとはなれてトーマス先生のほうにはしっていきました。先生は、一ばんまえで花田うえを見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。先生はおみせにいかないの？」

「ぼくは、なにもかわないよ。このおまつりを見に来たんだよ。」

「えっ。それだけ？」

トーマス先生は、にこにこしながらはなしてくれました。

「そうさ。ぼくは、花田うえを見るのがずっとたのしみだったんだ。」

「どうしてそんなにたのしみなの？」

「それはね、このおまつりには、すごいひみつがあるからさ。」

「どういうこと？」

「このみぶの花田うえを見るとね、日本の人たちが、むかしからおこめをみんなでころをあわせてつくってきたことがわかるんだよ。」

「へえ。そんなにすごいの？」

トーマス先生は、手をひろげながら大きなこえでたのしそうにはなしてくれました。

「いいかい。みぶの花田うえはね、ずっとこのしておきたいせかいのたからの一つにもえらばれていて、アメリカにいるときから見てみたかったんだ。それがひろ子ちゃんのすんでいるこのきたひろしま町にあるんだよ。それを九百年もむかしから、町の人たちでおしえあって、やってきているそうだよ。」

「九百年も！」

「そうだよ、この町の人、九百年もまえから、田うえのしごとがおわりになるのをおいわいして、みんなで力をあわせて、この一年に一回のおまつりをずっとつづけてきたんだよ。」

ひろ子は目をまるくしました。そして、田んぼのほうにかおをむけました。

いろとりどりのきれいなかざりをつけたうしが、なんともいます。ゆっくりと田んぼの中をあるいて田うえができるじゅんぴをしています。すると、男の人が、あいずを出しながらうたをうたい出しました。かさをかぶった女の人たちは、それにあわせていつせいにうたをうたいます。そして、みんなでなえをどんだんとうえていきます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチをまわし、たいこをたたいておどっています。たくさんの人がやっているのにごきがぴったりとそろっているのです。なえをうえている女の人も、たいこをたたく男の人たちもみんないっしょうけんめいで、中には、あせをかいている人もいました。

気がつくときひろ子は花田うえをむちゅうで見っていました。はっとしてまわりを見てみると、おきやくさんたちもみんなむちゅうで花田うえを見えています。カメラでしゃしんをとっている人たちもいます。トーマス先生は、ふえの音にあわせてからだをゆらしています。みぶの花田うえを見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子はにっこりとしました。

田んぼいっぱいになえがうえられ、おまつりがおわりました。気がつくとき、ひろ子は、立ち上がってだれにもまけない大きな手をしていました。そして「あした、学校にいったら、おみせにいて花田うえを見ていなかったともだちに花田うえのことをいっぱい話してあげよう。」とおもいました。

【参考文献】

北広島町（平成 21 年）「広報きたひろしま」

北広島町（平成 21 年）「壬生の花田植」

エ 授業展開例 ー学習指導案（略案）ー

主人公の心情に共感しながら地域への愛着をもたせる展開
～ 役割演技を生かした指導 ～

（ア） 主題名 町のじまん 4ー（5） 郷土愛

（イ） ねらい 自分の町にある伝統文化に愛着をもつようになった主人公の心情を考える活動を通して、自分の住む町の良さについて考え、大切に思う心情を育てる。

（ウ） 資料名 「みぶの花田うえ」

(エ) 学習指導過程

	学 習 活 動	主な発問と児童の心の動き	留 意 点 (☆評価の観点)
導 入	1 本時の学習に向けての意識を高める。	○ みんなが楽しみにしていることは何ですか。	○ 自由に意見を出させ、雰囲気づくりをするとともに、本時への方向付けをする。
展 開	2 資料を聞いて話し合う。	○ 屋台に友だちと走って行って、夢中で買い物をするひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・楽しいな。 ・たくさんいろんな物を買いたいな。 ・どんなお店が出ているのかな。 ・友だちと一緒にに行けるから楽しいな。 ・何かいいものがあるかな。 ○ どうして、ひろ子さんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。 ・とてもきれいだから。 ・花田植がすごいということが分かったから。 ・みんなが力を合わせて踊っていたから。 ○ 花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろ子さんはどんな気持ちだったのでしょうか。 ・外国の人も知っているなんてすごいなあ。 ・とってもきれいなお祭りだなあ。 ・みんなとてもうれしそうだな。 ・トーマス先生も喜んでいるな。 ・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。 ・壬生の花田植ってすごいなあ。 ◎ 友だちに壬生の花田植についてお話をしあげましょう。 ・壬生の花田植ってすごいんだよ。 ・外国でもとっても有名なんだそうだよ。 ・すごくきれいでね。いろいろな牛や衣装を着た人がいるんだよ。 ・ずっと昔からやってきているんだよ。 ・来年は一緒に見ようね。 ・私はいつかやってみたいと思っているよ。	○ 資料を読み聞かせ、写真を見せながら資料を提示するようにする。 ○ 屋台に興味が移っている主人公の心情を共感的にださせるようにする。 ○ 映像を見せながら、花田植の様子を具体的に見せて、夢中で見ている主人公の心情を想像させるようにする。
	3 自分たちの町の良さについて考える。	○ みんなが住んでいる町で、大好きなものや場所がありますか。 ・学校の友達です。 ・近所のスーパーです。 ・近くの公園があります。 ・お祭りで神楽をやっています。	○ 主人公になったつもりで、友だちに伝えたいことをワークシートに書かせ、共感することができるようにする。 ☆ 主人公になりきって語る役割演技を通して、児童の花田植に対する心情を引き出すことができたか。 ○ 指導者が、自分の生まれた町について人との関わりをもって宝物だと思っている場所について紹介し、それに対して、北広島町のじまを教えるという形式を取って意欲的に考えることができるようにする。
終 末	4 学習のまとめを聞く。	○ 児童の住む北広島町にもたくさんの宝があることを話す。 ・みんな話を聞いて北広島町もすてきな町なのだなと思った。	○ だれもが、自分の生まれた町を大切に思っていることを知らせ、学習のまとめをする。

(才) 資料分析表

[illegible]

(力) 板書例

みぶの花田うえ

○夢中で買い物をするひろろさんはどんな気持ちだったのでしょうか。

たくさんいろんな物を買いたいな。
どんなお店が出ているのかな。
友だちと一緒にに行けるから楽しいな。

○どうして、ひろろさんは、夢中で花田植を見たのでしょうか。

- ・とてもきれいだから。
- ・花田植がすごいということが分かったから。
- ・みんなが力を合わせて踊っていたから。

○花田植やみんなを見てにっこりと笑っているひろろさんの気持ち。

外国の人も知っているなんてすごいなあ。
・とってもきれいなお祭りだなあ。
・みんなとてもうれしそうだな。
・トーマス先生も喜んでるな。
・すごいお祭りが私たちの町にあるんだ。
・壬生の花田植ってすごいなあ。

◎友だちに壬生の花田植についてお話をしなう。
・壬生の花田植ってすごいんだよ。
・外国でもとっても有名なんだそうだよ。
・すごくきれいでね。牛や衣装を着た人がいるんだよ。
・ずっと昔からやってきているんだよ。
・来年は一緒に見ようね。
・私はいつかやってみたいと思っているよ。

トーマス先生が話した
壬生の花田植の
キーワード (短冊)

【板書の構成】

板書では、屋台に夢中になっている主人公と花田植に夢中になっている主人公の心情が対比できるように書いていく。

二つの心情の間をつなぐ線を書き、「夢中になっているものがどうして変わったのか」について、児童が考えたことをまとめておくことで、主人公の心情の変化が見えやすいと考える。

また、トーマス先生が話す花田植のすばらしさについては、キーワードごとに短冊にまとめて掲示しておくようにしたい。

役割演技の場面では、主人公に吹き出しをつけ、その中に重要な言葉だけを板書していくようにしたい。その際には、花田植自体の価値について述べたものと、実際にやっている人たちや、見て楽しんでいる人たちの様子について述べたものを分けて板書していくようにする。こうすることによって、役割演技のまとめを前述の二つの視点をもって行い、展開後半の、「人とのつながりで感じる私の町の好きなおところ」へとつなげていくことになると考えるからである。

(2) 活用のポイント

本資料では、地域に伝わるお祭りを題材として取り上げている。児童の実態として、壬生の花田植に行ったことはあるが、花田植に興味があるのではなく、人が多く集まる露天屋台などもあるイベントとしてとらえているのではないかと考える。ここでは、児童の実態に近い主人公が登場し、初めて花田植のもつ価値や地域の人々と花田植とのかかわり方について知り、愛着を感じていく様子が描かれている。地域の教材であることから、主人公の心情を考えていくことで、わが町への愛着も深まっていくような展開の工夫をしたいと考える。

この資料を通して、壬生の花田植について初めて知ることが、低学年の児童にとっては多いと考えられる。そこで、資料提示の工夫や動画の活用も重要になってくる。

ア 発問の工夫

まず、祭りの買い物から花田植に夢中になる主人公の心情の変化について考えた後、花田植のすばらしさを友だちに伝えようとする主人公になりきって考える活動を中心発問とした。

イ 役割演技の工夫

中心発問では、児童は主人公役となり、指導者は友だちになって演技を行う。地域の資料であるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

ウ 資料提示の工夫

本資料では、小学校第2学年の児童を対象と考える。授業を行う際には、スライドショーによる資料提示を行い、資料の内容理解を支援したい。

エ 動画の活用

花田植の場面では、実際の花田植の様子についてビデオを見せるようにしたい。写真だけでは伝えることのできない、音楽や人々の動きのすばらしさがあるからである。

(3) 授業の実際 ―児童生徒の反応を踏まえて―

ア 発問の工夫

最初に、主人公の屋台で買い物をしている時の気持ちについて発問する。これまでの壬生の花田植に対する主人公の心情について考える。舞台が学習者の住む町になっているので、学習者自身の

今の心情と近いのではないかと考える。この発問では、児童は屋台で買い物を楽しむ主人公の心情について考え、積極的に発言をすることができていた。「金魚すくいがしたい。」「どれを買おうかな。」というお祭りに行った時の自らの心情を思い起こして発言している児童も見られた。

次に、「なぜ、花田植を夢中で見るようになったか。」という発問を行う。主人公が花田植のすばらしさについて気付いたことを考えさせる。資料の内容のふりかえりもねらっている。花田植の知識を順に挙げてしまう場合と、大きく「花田植をすごいと思ったから」という意見を述べる場合があった。前者のようになったのは、その直前に、花田植のすばらしさを短冊にまとめたものをふりかえりながら提示したからであると考えられる。資料を読みながら提示していくとよりよいと感じた。

そして、周りの人の様子ににっこりとほほえむ主人公の気持ちについて発問する。主人公の町の人たちと一緒に花田植を見ているうれしさについて児童に考えさせたい。花田植とまわりの人たちを見てにっこりとしている主人公の心情については、「みんな楽しそうだな。」「この町に花田植があつてよかったな。」という考えが出てきていた。そのことが、次の役割演技に生かされていた。

中心発問では、屋台に行っていた友達に花田植の良さを伝えるためになんと言ったらよいのか考える発問をする。中心発問にかかわる児童の意見には次のようなものがあつた。

- ・花田植ってすごく大切だよ。私まで夢中になったよ。力を合わせてがんばっていたよ。
- ・みんな息ぴったりそろえてやっているんだよ。
- ・花田植って900年も前からやっていたんだって。
- ・ずっと昔から伝わっているんだって。
- ・花田植にいったらみんなニコニコして嬉しそうだったよ。
- ・花田植は町で教えあつてがんばっているんだよ。

一般化の部分では、花田植だけでなく、自分の身の回りにある「私の大切な場所・もの」へと目を向けさせたい。その際には、「誰と何をした大切な場所なのか」ということをしっかりと意識させたい。そのために、指導者自身のふるさと紹介

をしたい。壬生の花田植への愛着だけでなく、人とのつながりのあるこの町への愛着をこの学習では、しっかりと育てていきたいと考える。

イ 役割演技の工夫

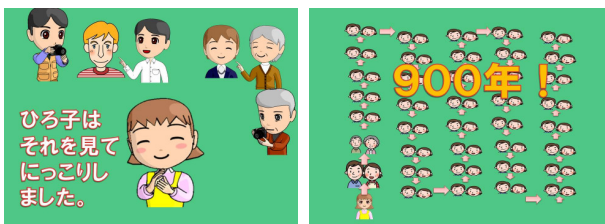
中心発問では役割演技を行った。この発問は、屋台にだけ行って花田植をほとんど見ていない友だちに対してそのすばらしさを伝えようとするものである。その友だちの姿とは、トーマス先生に出会う前の主人公自身の姿である。児童は、主人公になりきることによって、その価値の高まりを感じることができる。また、地域の資料があるので、主人公になりきって花田植の自慢をすること自体が、学習者自身の地域への理解や愛着に直結していくのではないかと考える。

児童は主人公役となり、指導者は友達になって演技を行う。実践の中では、児童は、花田植の無形文化財としての良さから述べていった。そこで、指導者は、「屋台ではみんな楽しそうに買い物していたよ。」と切り返しをしていく。このことで、花田植を楽しむ人々の様子についても述べられていき、「花田植」が地域の人々の中に根付き大切にされているものだということが明確になっていった。低学年の児童らしく、指導者が切り返しているうちに主人公になりきって、なんとか花田植の良さを分かってもらおうとする姿が見られた。

ウ 資料提示の工夫

資料に設定している場面は比較的理解しやすい場面であるが、低学年にとっては長い資料であり、900年などの難しい概念も出てくるので、映像や挿絵による支援が必要であると考えた。

実際にスライドショーを利用して行うことで児童は資料の内容を的確に把握することができ、3度の実践すべてが45分の1単位時間の中で計画通りに進めることができていた。



エ 動画の活用

資料中の花田植の場面では、壬生の花田植のビ

デオを見せるようにした。音楽や人々の動きから児童は、「花田植」自体が持つ、美しさや躍動感にひきつけられていき、すばらしさについて感じることができるようになる。花田植のビデオを見た児童の多くは、花田植のすばらしさについて誰かに知らせたいと感じるであろう。役割演技を行い、主人公と自らの心情を重ねることによってより考えが深まるのではないかと考える。

実際の授業の中では、児童は、この動画にとっても興味をもって見ることができていた。初めて花田植を見る児童もあり、場面の把握にとっても有効であった。この実践においては、その後の発問に対する児童の発言では、花田植の美しさや楽しさについての発言よりも、知識面についての発言が多く見られたように感じた。この花田植の資料では、「音楽」が見る者に与える要素が大きいことが改めて感じられた。

(4) 各教科等（体験活動を含む）との関連

この授業の展開後半では、「この町のわたしのすきな場所やもの」を考える活動がある。これは、「私のとっておき」を考える活動でもある。生活科の町探検の活動と密接につながっている。第2学年では、町探検を通して、すてきな場所を見つけたり、地域の人々にインタビューをしたりしている。本時の後に、生活科でたっぷり時間をとって、「私のとっておきの場所」を交流しあうこともできるのではないだろうか。また、ふるさとへの愛着とは、物や場所に対してではなく、人とのかかわったことによる思い出によるものである。生活科やさまざまな校外学習をマップに書き込みふりかえることで、郷土への愛着は増していくのではないかと考える。

(5) 心のノートの活用

「心のノート」PP.88-91には、「わたしを そだてる町」というページがある。このPP.88-89については本時の終末での利用が考えられる。このページを扱うことで、自分の住む町についてもっと知っていきたいと感じさせることができる。そして、事後の指導の中でPP.90-91を生かして新聞作りをしながら、自らの住む町への愛着を深めていきたいと考える。この事後の指導では生活科との関連を生かした活動を大切にしていきたいと考える。